

「後拾遺集」卷六「冬」評釈 (三)

安田純生

鷹狩をよめる

能因法師

うちはらふ雪もやまなむみかり野のきぎすの跡も尋ぬばかりに  
〔大意〕 うち払うほどの雪が降っている。御狩野の雉子の足跡を尋ねられるほどでやんでほしいものだ。

〔鑑賞〕 鷹狩を主題とした三首中の二首目の作品である。前歌が「雪げの空」を詠んでいたのに対し、これは、雪の降る折の鷹狩を詠んでいる。雪が降り出しそうな気配であったのが、いよいよ降り始めたわけである。

結句は、日野本・神宮文庫本・八代集抄本で「たえぬばかりに」となっている。「たえぬばかりに」ならば、「雉子の足跡も消えてしまわないほどで」という意になろう。『能因法師集』には、  
たかがり

うちはらふ雪もやまなむみかり野のきぎすの跡も尋ぬばかりに

と見えるので、少なくとも原作は「尋ぬばかりに」であった。また、ほぼ詠作の順に配列された同集によって、この歌が長久三、四年の作であることが判明する。

『後拾遺抄註』は、「オホヤケノ狩シ給野ヲミカリノト云也。ムネトハ河内の片野、大和ノ宇多野ヲ御狩ノトハイヘド、ソレナラズトモ、カリシタマハムノヨバイフベシ。又マサシクミヅカラカリシタマハズトモ、御タカガヒノ日次ノミカリセム野ヲバ、ミカリノトイフベシ。狩ヲモ御狩ト云故也」と注する。御狩野についての解説であるが、「みかり野」を歌語として用いたのは、もちろん、能因が最初ではない。すでに、

御狩野に朝たつきじのほろほると鳴きつつぞふる身を恨みつつ  
（源賢法眼集）

みかり野ののべに漂ふ草なれやかきつくべくもみえずなりゆく  
（朝光集）

みかり野のみ園にたてるひとつ松とかへる鷹のこるにかもせむ

(異本『能集』)

みかり野の高きこゆる鈴の音にしふるまじを思ひこそやれ

(長曆一年師房歌合) 弁乳母)

などの先例があつた。次の長済の歌も「みかり野」を詠み込んでゐる。ただ、長済は永保二年に五十九歳で歿した僧であるので、能因の歌より前に詠まれたとは考えられない。「能因法師集」によれば、能因は後に、「みかり野にまた降る雪はさえねどもまきずの声は春めきにけり」とも詠んでいる。

川村晃生氏は、能因の歌と源道済の「みかりする交野へぞゆくはしたかのはねうちらはらひ雪はふりつつ」(『道済集』)との類似を指摘されている。能因が道済の一首を学んだと見ていいようである。とすれば、能因の念頭にあつた御狩野は、やはり、河内国の交野である。交野は、「交野の御野」ともよばれ、山城国の北野、大和国の宇陀野と並ぶ禁野のひとつであつた。能因以前では、『好忠集』『兼澄集』『匡衡集』に交野の雉子を詠んだ作が見られる。雉子は、いうまでもなく、鷹狩の主たる対象となる鳥である。

#### 律師長済

萩はらも霜がれにけりみかり野はあさるまきずの隠れなきまで

〔大意〕 御狩野は、餌を求めぬ雉子の姿が隠れなく見えるまでに、萩原も霜によって枯れてしまったことだ。

〔鑑賞〕 前歌と同じく、この歌も御狩野の雉子を詠んでいる。

また、次の大中臣能宣の歌とは「霜がれ」という語が共通する。鷹狩の歌であるが、霜を副主題としており、霜を主題とする歌群と緊密につながっている。もつとも、雪を副主題とする鷹狩の歌の後に霜枯れの野を詠んだ鷹狩の歌が来るのは、季節の推移からいえば落ち着かない。霜がおり、そして雪がふるのが普通であらう。『後拾遺集』冬部でも、副主題を無視して主題だけを取りあげれば、鷹狩・霜・雪の順になつてゐる。とはいへ、詞句の共通性を重視する立場にたつと、能因の歌と長済の歌、長済の歌と能宣の歌とは、いずれも切り離すことはできない。一方、長家の作は、「雪げの空」を詠んでいる故に、雪中の鷹狩を詠んだ能因の歌と離せないし、能因の歌の後ろに配列するのも具合が悪い。したがって、鷹狩を主題とする三首は、作品の差し換えを考えない限り、長家・能因・長済と配列するのが、もつとも自然ということになるわけである。

さて、長済は、霜のために萩が枯れ、雉子の姿があらわになつた旨を歌っている。古く『万葉集』巻八に、大伴家持の「春の野にあさるまきしの妻ごひにおのがありかを人に知れつつ」があり、季節は相違するが、「あさるまきず」のありかが知られるとした点は類想である。家持の作は、『拾遺集』巻一、『古今六帖』第二のほか、藤原公任撰の『金玉集』『深窓秘抄』『三十人撰』『三十六人撰』、さらに『能因歌枕』にもとられており、彼の代表作のひとつであつた。長済もまた、よく知っていたはずである。しかし、より直接的には、長済は、『和泉式部集正集』所収の「狩人のいとまもあらじ

草若みあさるきぎすの隠れなければ」から影響を受けたのではなからうか。下二句が似ているし、雉子の鳴く声によってありかがわかるとした家持の作と異なり、雉子の姿が目に見えるとしたところが、長済の歌と同様である。さらに、天喜四年閏三月に開催された

と推定されている「裸子内親王歌合」にも、「み狩する人もこそ聞け隠れなく浅茅が原にきぎすなくなり」(讃岐)という一首が見える。「隠れなく」といった点は長済の歌と類似するものの、長済の歌の詠作時期が不明なので、先後を明らかにしたい。

初句を「萩はらも」としたのは、秋に美しく花を咲かせていた萩のイメージを喚起することにより、霜枯れの景のさびしさを強調するためであろう。萩と雉子とは、萩と鹿との関係のように、密接なものとして観念されていたわけではない。

ところで、紀貫之の屏風歌の中に「霜枯れになりにし野べと知らねばやかひなく人の狩に来つらむ」(貫之集第三)というのがある。同じ鷹狩を題材としながらも、貫之は、霜枯れを知らずに狩に来たのかといふ方が、長済は、霜枯れ故に狩には都合がいいと歌っている。この二首の間に介在するものは、現実には霜枯れが鷹狩にとってどうかといった問題ではなく、古今的美意識とこの時代の美意識との相違であろう。貫之の時代には、霜枯れの野は寂しいばかりの場所であったのに対し、長済の時代には、たとえば「春秋の花のをりにもまさりけり霜がれわたる野べのけしきは」(長曆二年師房歌合)と詠まれているように、そのさびしさが美として捉えられていた。

「源氏物語」にも、「霜枯れの前裁絵にかけるやうにおもしろくて」

(「若紫」とか、「霜枯れの草むらをかしよう見えわたるに」(「閑居」とかいう一節がある。長済は、そういう新しい時代の美意識を背景に、掲出の一首を詠作したのである。

屏風の絵に十一月に女のもとに人の音したるところをよめ  
大中臣能宣朝臣

霜がれの草のさしはあだなれどなべての人にあくるものかは  
〔大意〕 霜のせいで枯れてしまった草によって閉ざされたわが家の戸は、頼りにならないけれども、何でもない人のために開けるものではない。

〔鑑賞〕 霜を主題とする作品である。霜の歌は三首あって、霜枯れを詠んだ二首が先に置かれ、霜そのものを詠んだ一首が後に置かれていた。霜枯れの歌を先にもって来たのは、長済の歌との連絡を密にする意図による。霜がおりて始めて霜枯れになるとの理屈からすれば、霜そのものを題材にした、二首あとの詠み人知らずの歌を最初に置きたいところである。

下二句は、日野本・神宮文庫本・太山寺本などの諸本で「なべての人をいえるものかは」となっている。国歌大観本でも「をいえるイ」と注記されている。「私家集大成中古」に翻刻された二種の『能宣集』(西本願寺本・書院部本)には「なべての人はいえるものかは」の形で見え、日野本以下の諸本に近い。ただ、西本願寺本『能宣集』の詞書に「十一月許、女のいへにまかりて消息しはべるにかくましけり」とあって、実際の恋愛体験にもとづく歌で、しかも能宣の相

手であった女性の作とするのは不審である。書陵部本の詞書の「十一月、人のいへにをとこまうできて、せうそくしはべれば、女みるところ」は、月次屏風に添えられた屏風歌であった事実を示しており、『後拾遺集』の詞書と合致する。もともと、屏風歌であつてもなくても、一首の内容が女性の心を表わしているのは変らない。画中の女性は、訪れて来た男を「なべての人」と見て、逢うことを拒否しているのである。書陵部本『能宣集』において、この歌の次に載せられている「霜がれの野べになければ女郎花ありてふ宿をたづねてぞくる」は、同じ画面中に描かれた男性の立場で詠んだ作である。

「草のとぎし」に関しては、『後拾遺抄註』が、「草シゲリタル門ヲバ草ノ戸鎖ナドヨムナリ。ヨモギノカド、ムグラノカドナドモマサシクカドニセネド、門ニシゲリタルバイフヤウニ、草シテトヲサストイハムコトモ同事也」と注した上で、『後撰集』卷十三所収の、

女の許にまかりたりけるに、門をさしてあげざりければ、まかり帰てあしたにつかはしける

兼輔朝臣  
秋の夜の草のとぎしのわびしきは明くれどあけぬものにぞありける

かへし

読人しらず  
いふからにつらさぞまざる秋の夜の草のとぎしに障るべしやは

という贈答を引いている。『古今六帖』第二にも「ちはやぶる神のいがきも越ゆる身は草のとぎしに障るものかは」が収められているが、能宣は『後撰集』の贈答を学んだ、と見てよからう。「霜がれの草のとぎし」が「あだ」であるのは、草が枯れたのでは「とぎし」の役割を十分に果たさない故である。

なお、内容的には恋歌であるこの歌を冬部に撰入したのは、屏風歌であつたことと関わりがあるかもしれない。

霜がれの草をよめる

少輔

霜がれのひとつ色にぞなりにける干ぐさに見えし野べにはあらずや

大意

霜のせいで枯れた野は一色になってしまったことだ。

秋には、花によって色さまざまに見えた野べではなかったか。

鑑賞

前歌と同様、霜枯れの景が詠まれている。能宣・少輔の順に配列された理由は、よくわからない。少輔・能宣の順にした方が、野を詠んだ作が長済・少輔と続き、宿を詠んだ作が能宣・詠み人知らずと続くので、連環がより緊密であるように思える。

「干ぐさ」は、たとえば、「秋の露いろいろことに置けばこそ山の木の葉の干ぐさなるらめ」(『古今集巻五』)のごとく木の葉の紅葉にいわれたり、「菊の花ちぐさの色を見る人の心さへにぞうつろひぬべき」(『古今六帖』第六)のごとく菊の色の移ろいにいわれたりもする。しかし、ここでは、

わが宿に千ぐさの花をうゑつれば鹿のねのみや野べに残らん

〔後拾遺集〕卷四 源頼家

秋の野の千ぐさに咲ける花の色の乱れてものを思ふころかな

〔古今六帖〕第六 作者未詳

秋の野の千ぐさの花は女郎花まじりておれるにしきなりけり

〔貫之集〕

りんだうも名のみなりけり秋の野の千ぐさの花の香には劣れり

〔源順集〕

秋の野の花の露とも知らざりつ千ぐさの色における白たま

〔公任集〕

月影のさやかならずは秋ふかみ千ぐさに匂ふ花を見ましや

〔康保三年八月内裏前観合〕大江奇光

などと同じく、秋の野の花を指すと見られる。つまり、秋の野には様々な色の草花が美しく咲いていたのに、冬の野は枯れ色一色だ、というのである。「ひとつ」と「千ぐさ」とが対比されているが、類似した表現は多く、その一端を示せば、

花ぐはし葦垣ごしにただ一目あひ見し子ゆゑ千たび嘆きつ

〔万葉集〕卷十一 作者未詳

君こふる心は千々にくだくれど一つも失せぬものにぞありける

〔後拾遺集〕卷十四 和泉式部

千年ふる松のみどりは深けれど一夜の雪にうづもれにけり

〔治暦二年様子内親王歌合〕作者未詳

などがあげられよう。

『後拾遺抄註』には、『古今集』卷四所収の詠み人知らずの歌、

「緑なるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける」が引かれており、「此歌ノ躰敷」とある。『八代集抄』も、同歌を紹介して「此歌を翻案せしにや」と注する。内容的には、確かに『古今集』の歌を踏まえているといえる。が、詞句の面からいえば、むしろ、『躬恒集』の「千ぐさにも霜にはうつる菊の花ひとつ色にぞ月はぞめける」との関連が深い。少輔は、これら両首にもとづいて掲出の歌を詠作したのであろう。

霜落葉を埋むといふ心をよめる

詠み人知らず

落ちつもの庭の木の葉を夜のほどに払ひてけりと見する朝霜

〔大意〕 落ちつもっている庭の木の葉を夜の間にすべて払ってしまったと見せて、白くおりに朝の霜であることだ。

〔鑑賞〕 霜が白く庭一面におり、ふりつもった落葉が見えなくなったのである。白楽天の詩の一節、「秋ノ庭ハ掃ハズ藤杖ニ携ハリテ、閑カニ梧桐ノ黄葉ヲ踏ミテ行ク」〔秋閑居〕や「宮葉ノ階ニ満チテ紅掃ハズ」〔長恨歌〕と遠くこだましているかのように感じられる。庭の紅葉を愛惜して今まで払わずにいたのに、霜が一夜のうちに隠してしまったわけである。といっても、霜を恨んでいるのではない。紅葉以上に美しい霜に心をうたれた体の歌である。詞句の上では、「永承内裏歌合」で藤原長房が詠んだ、「むらさきに移ろひにしをおく霜のなほ白菊と見する今朝かな」とも関係があ

りそうに思われる。

ともあれ、この歌では、落葉の紅色や黄色がおのずから想像されるので、白い霜の印象がいつそう鮮やかである。また、「庭の木の葉」という言葉は、現代人のわれわれには、一見、平凡に思われるが、当時においては清新であつたらしい。この歌が愛誦された結果か、「庭の木の葉」といっただけで落葉を意味するようにもなった。そして、中世の歌人たちによって、

霜さゆる庭の木の葉を踏みわけて月は見るやと問ふ人もがな

〔千載集〕卷十六 西行

山おろしの風なかりせばわが宿の庭の木の葉をたれ払はまし

〔続後撰集〕卷八 藤原清輔

思ひやれ庭の木の葉を踏みわけて問ふ人もなき宿のさびしさ

〔安元元年石大臣家歌合〕源行頼

吹きまよふ峰の嵐はつもりにし庭の木の葉をまた散らしけり

〔十五百番歌合〕藤原公継

とどまらぬ秋をや送るながむれば庭の木の葉のひとつへ行く

〔式子内親王集〕

よもすがらこほれる露を光にて庭の木の葉にやどる月かげ

〔秋篠月清集三〕

宿しめしかひもあるかな初しぐれ庭の木の葉に訪れてゆく

〔拾玉集〕第一

松虫の声はつれなきふる里の庭の木の葉に秋風ぞ吹く

〔玉二集中〕

などと、しばしば使用されている。右に掲げた作品のうち、清輔の一首は、明らかに『後拾遺集』の詠み人知らずの歌を本歌としている。

ちなみに、この詠み人知らずの歌は、彰考館本の勘物によれば、伊勢大輔家女房の侍従尼の作であるという。侍従尼の夫は慶範法師といい、やはり『後拾遺集』の歌人である。

#### 霰をよめる

大江公資朝臣

杉の板をまばらにふけるねやの上におどろくばかり霰ふるらし

〔大意〕 杉の板をまばらに葺いている間の上に、はつとするとに霰が降っているようだ。

〔鑑賞〕 霰を主題とする二首の第一首目である。

杉の板をまばらに葺いた間といえは、やはり、山里の家であろう。霰は、一般的に山への景物として歌われる例が多い。山里の庵に寝ていると夜中に霰が降ってきたのである。「まばらに葺ける」とある以上、『八代集抄』の「あられのもり入て、ねぎめたる心なるべし」との注は首肯しなければなるまい。公資以後の作ではあるが、治暦四年十二月に開催された「裸子内親王歌合」の出詠歌に、「ぬともなしあられふる屋の板間あらみもりくるごとに夢さましつ」(「言」)というものもある。しかし、寝覚めの原因は、霰が板間からもれてきたせいばかりではなく、板屋根にあたって立てる音も一因であろう。『枕草子』の「ふるものは」の段に「ふるものは、雪、

霰。(中略)時雨、霰は、板屋」とあり、板屋にばらばらと音を立て降る霰は、風情あるものとされていたようである。杉の板については、『後拾遺抄註』が「スギノイタ、マキノイタナドヨム事也」と述べ、『万葉集』卷十一所収の「杉板もてふける板目のあはぬをばいかにせむとかわが寝そめけむ」を引いている。ただし、この『万葉集』の歌は、現在では、ふつう「そぎ板もちふける板目のあはざらはいかにせむとかわが寝そめけむ」と訓まれている<sup>(4)</sup>。

霰の特色というと、それが降る音と玉のような形状であろう。菅原道真の詩の一節にも「聲牙米簸テ声々脆シ、龍領珠投ゲウツテ顆々寒シ」(和漢朗詠集「巻上」霰)とある。しかし、和歌の世界では、従来、

かきくらし霰ふりしけ白玉をしける庭とも人のみるべく

(後撰集「巻八 読人不知」)

霰ふり玉とは見れど捨ておきて心のごとくぬかば消ぬべし

(古今六帖第一 作者未詳)

宿はあれてあられふれば白玉をしけるがごとみ見ゆる庭かな

(和泉式部集正集)

などのように、主としてその形状が詠まれて来た。大江公資の妻であった相模も、「ねやの上にあられふれば時のほど心にあらぬ玉をこそしけ」(相模集)と歌っている。霰の音が注目され出すのは、公資の頃からであって、その点、『後拾遺集』の霰の歌が二首ともに音を題材としていることの意味は大きい。

### 山里の霰をよめる

橘俊綱朝臣

とふ人もなき葦ぶきのわが宿はふる霰さへおとせざりけり

〔大意〕 訪れて来る人もいない葦葺きの私の家は、降っている霰さえも音をたてないことであった。

〔鑑賞〕 山里の葦葺きの家に住む庶民の立場で詠んだ作品である。「音す」には「訪れる」という意もあり、『八代集抄』が「あられさへといふにて誰も音づれぬ心ふかくこもれり」と注するとおり、「さへ」が利いている。もちろん、一・二句に「とふ人もなき」と置いて山里の寂しさを叙するのは、類例が多い。「宿」にかかる先例に限っても、

とふ人もなき宿なれど来る春は八重むぐらにはさはらざりけり

(貫之集「第二」)

とふ人もなきわが宿のむらしぐれふたよりみより驚かすかな

(伊勢大輔集)

とふ人もなきわが宿のみぢ葉は風だに知らぬ物にぞありける

(経術集)

といった作があげられる。また直接的には、俊綱は、橘為仲の「とふ人もなき冬の夜のさよなかに音するものは霰なりけり」(為仲集)を学んだのであろう。為仲・俊綱の両首ともに詠作時期が明らかでないとはいえ、歌人として俊綱の先輩であった為仲が俊綱の歌を学んだと考えるよりも、俊綱が為仲の歌を学んだと推定した方が自然



